

第 22 回 沖縄科学技術大学院大学学園の今後の諸課題に関する検討会 議事要旨

1. 日時：令和 2 年 6 月 24 日（水）15:30～18:00
2. 場所：Skype 会議／中央合同庁舎 8 号館 1 4 階内閣府沖縄振興局長室
3. 出席者
 - (1) 構成員
相澤座長、西澤委員、大島委員、岡崎委員、長我部委員、小柴委員、瀧澤委員、宮浦委員、山本委員
 - (2) 内閣府
原沖縄振興局長、水野審議官、田村総務課長、中島次長、宮腰企画官
 - (3) OIST
グルース学長、バックマン首席副学長、コリンズプロボスト、吉尾 COO、芝田副学長、レイ副学長ほか
4. 議事要旨
各委員から主に以下のような指摘・意見があった。

<議事 1 OIST の 10 年後見直し>

(中間取りまとめ(たたき台)に関する審議)

「1. 組織運営」

- OIST の独自性のある組織運営が、今後の日本のトップクラスの研究大学の組織運営のモデルとして非常に重要となってくる。これをより具体的なモデルとして示し、日本の研究大学の問題点を突破できる案として、OIST が沖縄で実験的に新しい組織運営をやっていくことの意味を明確にしていく必要があるのではないか。
- 以前の検討会でフィードバックされた資料を補強し、法人の組織と大学の組織のリンクを明確にした資料を再度ご提出いただきたい。
- 経営と運営をどのように区分しているのか、法人の経営なのか、大学の運営の話なのか分かるよう整理していただきたい。

「2. 教育研究」

- OIST では多様な方々が多様な形で活躍している。日本の大学は学生も教員も日本人中心だが、OIST の成功例を日本の大学にトランスファーする際に、どういう観点がトランスファーできるのかということを加えると、OIST の先行的な試みがあまねく日本の大学にも参考となるのではないか。
- 日本の大学にも外部評価はあり、評価を受けて研究や教育にフィードバックし、改善するというをやっている。OIST には、おそらくその評価を直に研究に素早くフィードバックできる機能があるのではないか。比較的コンパクトな大学ということもあるのかもしれないが、研究環境を始め、日本の大学にないユニークな点がどこなのかということもハイライトしていただきたい。
- モビリティについては、具体的に OIST の研究者でどれぐらいのモビリティが働いているかという実例があったほうが理解しやすい。また、モビリティの問題は、受け入れ先の都合もあるため、日本全体で取り組んでいかないと難しいと思っている。

「3. 沖縄の振興及び自立的発展への貢献」

- OIST 運営費の大半が沖縄の予算から出ていることに鑑みると、どのように沖縄に貢献するかということの説明責任があるのではないかと。沖縄県が策定した新沖縄発展戦略や、沖縄県の各市町村の計画と、OIST の各研究者が研究されている内容とを、できればひもづけしていただきたい。
- 世界最高水準の研究をしつつ、地元沖縄の役に立つ、産業を育成するということは、ジレンマであるような課題だと認識している。沖縄の地の利を生かした研究、研究と土地がかなり密接に結びつくような分野を特に強くしていくことによって、必然的にそれが沖縄の産業の強化や、沖縄の地域との連携につながるのではないかと。また、ファンドをドライバーとして地域と密接に結びついた高いレベルの研究を、いい形で産業に結びつけていく。そういうような構図を OIST から発信していくことが重要。
- 今回、大阪大学のベンチャーが COVID-19 のワクチンの治験に貢献するというところで、初めてベンチャーに我々が救われるという時代が来たと感じている。他と比べて、圧倒的にテクノロジーのレベルを上げているということでないかと、地域を振興させるようなインパクトのあるベンチャーはできない。それでも早くても7～8年から10年かかってしまうのがベンチャーの世界。研究や教育は非常に優れたプロジェクトで、戦略を持って遂行されているが、産学連携になると、理念が先走っているような感じがする。
- 例えば鶴岡はおそらく今の OIST よりも少ない人数ですばらしい技術を出している。
- 地域交流については、鶴岡の高校生バイオサミットのように若い人たちがアクティブ・ラーニングできる事例を広げると、沖縄の若い人たちにとって非常に大きな刺激になるのではないかと。
- 中学生、高校生イベントは次世代育成で重要であり、沖縄の産業振興上も重要ではあるが、PI の方、あるいはポスドクの方の時間をあまり割かないようにという配慮も必要。

「4. 広報、情報公開、その他法令遵守等」

- OIST は SDGs に関する地域とのタイアップや EF ポリマーやバイオアルケミー等、サーキュラーエコノミーに関連するような研究もなされていることから、ぜひそういう点を広報の一環として掲載していただきたい。また、OIST 自身も SDGs の基本構想、基本計画を策定されてはどうか。
- OIST の研究は、いわゆる STEAM (Science, Technology, Engineering, Art, Mathematics) 教育。この STEAM 教育と OIST でやっている研究との親和性は非常に高い。そのため、例えば広報も含めて教育に用いるのも、研究成果の一つの道なのではないかと思っている。また、リスクマネジメントということで、コロナに関連したメンタル的なケアも含めて、もう少し具体的に示していただいてもいいのではないかと。

「5. 財務」

- 外部資金の目的からすると、中期的なタームで獲得目標を設定したほうがいいのではないかと。また、規模拡大する場合の施設整備の財源については、何らかの評価なり、方向性を出さないといけないのではないかと個人的には思う。この際、その施設整備についても、寄附金等の獲得を考えてもいいのではないかと。
- 資金については、最近、東京大学が出した大学債を使われるというのは一つの方法。おそらく1%以下の金利で調達できる。国は信用を供与すれば、お金を出さなくていい。もし本当に5000万ドルのVCを立ち上げるとすれば、イメージ的にいうと、アーリーステージと考えて、VCの指示システムを組んでいかなければいけない。やはりVCは東京においてネットワークを最大に活用しないと、なかなか難しいだろう。

(今後の総括的な議論の進め方について)

- 最終取りまとめに向けて、今後、以下の点に留意して総括的議論を行っていきたいと考えている。
 - ・ネイチャーインデックスでの高評価等、国際競争力を短期間で持てるようになったことを始めとする、これまでの OIST の成果・取組を国際的なベンチマークによる検証等も踏まえ、どのように評価するか。
 - ・中長期的な視点から計画的に OIST の規模や在り方等を政府も含めて検討する枠組みの必要性や OIST が将来目指すべき規模を考える上での、クリティカル・マスの考え方やその根拠、更には、日本の科学技術政策全体の中で OIST をどう位置付けていくべきか。
 - ・OIST が国際的頭脳循環の拠点になることが沖縄、日本にとっても重要であり、その方策を検討し、実行していく必要があるのではないか。
- 今、日本全体でそういう傾向がすごく強くなっていると思うのだが、あまりにも短期的な、イノベーションのような効果を大学に期待し過ぎている。人を養うという意味で、大学は極めて重要な機能を果たしているのであって、少し大きく捉えた発信を先生方から指示していただいて、理論づけていただきたい。
- OIST が国際的頭脳循環の拠点となること、その方向性は非常にいいと思うが、OIST が沖縄に立地している意義や、その影響力を明確化し、日本全体にとっても重要であることを勘案して、その方向から検討し、実行していく必要がある。

以上